

エコdeスマイルコンテストinみやぎ – コンテストで地域に根差した活動を発見！



「エコdeスマイルコンテストinみやぎ2009」の受賞者

	2007	2008	2009
応募数	61件	68件	76件

「エコdeスマイルコンテストinみやぎ」は、個人、NPO・NGO、学校、企業、自治体などを対象に、宮城県内で行われている草の根的なエコな活動や物を募集し、その中から身近な日常生活と結び付いた優れた地球温暖化対策の取組を表彰するコンテストです。

このコンテストは、環境省の「ストップ温暖化一村一品大作戦」事業として全国で一斉に行われ、他県でも工夫を凝らしたネーミングで同様のコンテストが開催されていました。

地道に取り組みれていた地域に根差した活動にスポットを当て、地域から都道府県そして全国へと発信し、低炭素社会の礎となる取組をより推進することを目的として行われました。環境省の事業は事業仕分けによって予算が打ち切れ2009年度で終了となり、2010年度以降は民間から開催資金を集めて「低炭素杯」、2019年度以降は「脱炭素チャレンジカップ」と名称を変えながら続いています。



■最優秀賞の受賞団体



2007年度・最優秀賞「魚のまち塩竈地域エネルギー好循環形成事業」

- ・応募団体：塩釜市団地水産加工業協同組合
- ・活動内容：塩竈市の基幹産業は水産加工業であり、その中でも揚げ蒲鉾生産量が多いことから、その使用済み油を活用してBDF（バイオディーゼル燃料）化事業によって資源へと転換し、循環型社会の構築とCO₂削減、基幹産業の活性化を目的とし、エネルギーの地産地消を目指しています。廃食用油の回収先は、揚げ蒲鉾工場が9割を占め、回収した廃食用油は、精製プラントでさまざまな工程を経てBDFにしています。精製したBDFは車両等に給油するため、不具合を起こさないよう品質分析も実施しています。



2008年度・最優秀賞「温暖化・ぼくらがとめる・まかせとけ！～わたしたちのエコタウン宮町2008～」

- ・応募団体：仙台市立北六番丁小学校6年生
- ・活動内容：学校では、エコロジーハウス・梅田川エコ水族館の小屋をアサガオで壁面緑化し、梅田川から取ってきた魚やザリガニを中で飼育しています。家庭では、夏休みを利用してストップ温暖化のアイデアを各家庭で実践してきました。地域では、東北工業大学・近藤研究室と宮町商店街の協力で、レジ袋削減などの取り組みを行っていく予定です。子供たちが主体となって、学校から家庭、地域へとストップ温暖化の輪を広げていく活動です。



2009年度・最優秀賞「エコーガニック with ノーマライゼーション」

- ・応募団体：株式会社ウジエスーパー 株式会社ウジエクリーンサービス（障害者特例子会社）
- ・活動内容：スーパーから排出され、焼却処分していた食品残渣を有機質肥料化し、その有機質肥料を地元農家が使用し米や野菜を生産、さらにその米を原料に地元醸造が純米吟醸酒を製造しました。それらをプライベートブランドとして販売する循環を確立。また、さまざまなところとタイアップして環境活動が広がっています。そしてその全工程に障がい者雇用を創出し、環境に優しく、地球を元気にし、みんながHAPPYになる取組です。

「温暖化・ぼくらがとめる・まかせとけ！

～エコdeスマイルコンテスト」

MELON事務局 職員 亀崎英治



私が小学校の教員として仙台市立北六番丁小学校に勤務していたとき、ストップ温暖化センターみやぎからエコdeスマイルコンテストに出ないかという話をいただき、2007年と2008年に子どもたちが参加しました。特に2008年の大会では最優秀賞である宮城県知事賞を受賞し、全国大会の「ストップ温暖化一村一品大作戦」にも出場させていただきました。題名は「温暖化・ぼくらがとめる・まかせとけ！～わたしたちのエコタウン宮町2008～」です。その内容は……。

8年後の2016年、当時6年生だった子どもたちも20才の成人を迎え、小学校の校庭に次々と集まって思い出話を始めます。

最上級生となり、先輩たちから受け継いだ梅田川エコ水族館。それは、使われなくなった鳥小屋をエコロジーハウス「太陽と緑の梅田川水族館」に改装したものです。屋上に設置した太陽光・風力発電で水槽内のポンプを動かし、アサガオとヘチマのグリーンカーテンで壁面を覆っています。中では、近くを流れる梅田川に生息する絶滅危惧Ⅱ類のギバチが涼しげに泳いでいます。また、東北工業大学の近藤祐一郎先生と学生のみなさんの協力により、牛乳パックで作ったエコバッグを持って、地元の宮町商店街で買い物をしました。「レジ袋はいりません。」そう言うと、お店の人から地域通貨「エコイン」が渡されます。それを集めて商店街のすてきな品物と交換できる福引き大会も行いました。「温暖化・ぼくらがとめる・まかせとけ！」の合い言葉を思い出し、今も梅田川水族館があることに誇りと伝統を感じるというストーリーでした。地球温暖化防止のために、苦痛を感じるのではなく、楽しみながら取り組んだことが評価されたと思います。

さて、当時の子どもたちは今年で24才。その中の一人、Sさんは「先生になってクラスの子どもたちに尋ねられ、梅田川水族館やエコバッグのことを懐かしそうに思い出す」という架空のストーリーを卒業文集に書いていました。Sさんは夢を叶え、現在、中学校の数学の先生として働いています。Sさんは、当時の活動のことを果たして覚えているのでしょうか。そして、子どもたちにそのことを語っているのでしょうか。夢は広がります。



「エコdeスマイルコンテストinみやぎ2008」
表彰式の様子



全国大会「ストップ温暖化一村一品大作戦」
出場の様子